1.「ひとつだけ」

１年近い活動休止を経っても、JUDY AND MARYの状況はほとんど変わっていなかった。表面上は穏やかな顔を見せてはいたが、前へ進んでいこうとする力は希薄に思えた。このままではアルバムのレコーディングに入ることはできない。いい曲ができたら、そのたびに少しずつ録っていこう。それがまとまったらアルバムになると思うから。TAKUYAの提案で、バンドはようやく前に進み始めた。

YUKIは元気だった。高校時代に友達と興奮してささやき合った「1999年地球滅亡説」。いつのまにかそのX-dayは過ぎ、2000年というミレニアム・イヤーを迎えられたことを素直に喜んでいた。

（99年も無事に過ごせた！　最高！ 2000年はいろいろあるぞ~。変わることが楽しみだ。どんどん新しいものに触れていこう）

新しい年の新しい生活のなかで、ゆっくりと振り返る。ずっと、目の前にあるもののことだけを考えてきたら、すべてがごく当たり前に、それでいてドラマチックに、変化してきてしまった。そんな自分の人生が、なんだかとてもおもしろい。

そのいっぽうで進路が定まらないJUDY AND MARY。佐久間正英プロデュースでThe B-52’sのケイトとダブル・ボーカルの任を負ったNiNaのおかげで歌唱力がついたYUKIは、「Brand New Wave Upper Ground」のレコーディングでTAKUYAにほめられ、仕上がりにも大満足だった。しかしかつてはいい作品ができるたびに全員でガッツポーズを取ることができたバンドは足並みが揃わず、盛り上がりにもマジックにも欠けている。

（やっぱりこんなもんなのかなぁ）

それでも久しぶりのライブは楽しかった。ファンクラブ会員限定のツアー“WELCOME 2000 JAMP meeting”。1月19日のZepp Osakaから27日のZepp Tokyoまで計5本。

約１年ぶりのステージとなるこのライブの目玉は、ファンによる抽選で曲を決めるコーナーだった。予想外の曲を引き当てられてしまい、頭を抱えるメンバー。うろたえたり、開き直ったり、顔を寄せ合ってスコア（楽譜）をのぞき込んだり、という滅多に見られない４人の姿に客席は沸いた。どんなに大きくなっても決して遠くへは行かないこのバンドを、フィンはみな愛していた。

アンコールは１曲のみ。「PEACE」という仮タイトルの曲だった。TAKUYAがキーボードを弾き、YUKIが言葉を落とすように歌う。リハーサルをしながら詰めていった歌詞は、まるで“祈り”のように聴こえた。

この曲がやがてJUDY AND MARYのラスト・シングルになることは、まだ誰も知らない。作った本人たちでさえも、その後の展開は予想していなかった。

2月23日「Brand New Wave Upper Ground」リリース。テレビ出演もこなし、JUDY AND MARY復活が世間に知れわたった。3月23日に出た初のベスト・アルバム『FRESH』もチャートをにぎわした。

まだ出すつもりはなかったベストだったが、「今までJUDY AND MARYを聴いてこなかった人にも聴いてもらいやすいものを出そう」というレコード会社のスタッフの言葉に納得し、GOサインを出した。

（「POWER OF LOVE」を今聴いても、全然古くないなぁ。やっぱり私たち、本当のベスト・アルバムが出せるほど長くやってないんだ）

タイトルの命名はYUKI。過去の曲を“新鮮（=FRESH）”と思えることが嬉しかった。

（大丈夫。まだまだやれるよ）

ベストの次は新曲だ。新しいJUDY AND MARYをみんなが待っている。

プリプロ（レコーディング前のリハーサル）は、曲の出来を判断し、スタジオに入ってからの作業をスムーズにするための重要な作業だ。レコーディングよりプリプロに時間をかけるバンドも多い。しかしJUDY AND MARYは、その作業を個人個人ですることに決めた。

公太さん（五十嵐公太）の曲は公太さんが知り合いのミュージシャンを集め、スタジオに入る。恩ちゃん（恩田快人）の曲は恩ちゃんが知り合いのミュージシャンを集め、スタジオに入る。

（でもそれはあんまりだよなぁ）

だからYUKIは全部の現場に行き、歌った。メンバーもYUKIが来ると嬉しそうだった。

３月。「ひとつだけ」のレコーディング。

歌入れが難航し、TAKUYAに３時間で「今日はもうおしまい」と言われた日もあったYUKIだったが、確信はあった。

（いっぱいものがあっても、もういらない。輝くものはひとつあればいい。欲張ってもあまり成果は出ない。歌う人は、もっとギュッとしていたほうがいい）

この時ノベルティとして作られたポストカードに、YUKIの言葉が書かれている。

　いろんな事が恐くならないように

　私は今日を生きています。

　優しい心や美しい人にふれる度

　幸せを恐れない気持ちが強くなっています。

　だから私はもっている。

　いつでも胸に、ひとつだけ。

　なんちて。

YUKIが好きな漫画家・岡崎京子も、著書のあとがきで「私たちはいろいろなものが恐いから、こうしてものを作ったり書いたりしている」と書いていた。考えすぎると、何もかもイヤになる。それは仕方のないことだから、無理に否定せず心をうまく逃がしてやらなければいけない。暗い気持ちは「今、自分は暗いんだ」とそのまま受け止め、でもそこに落ちないために歌ったり、遊びに行ったり、ごはんを作ったりする。

「ひとつだけ」は当初、「ひまわり」というタイトルがつけられていた。作詞は、TAKUYAとYUKIの共作ペンネームであるTack and Yukky。

TAKUYAの願いは「YUKIをデビュー当時に戻すこと」だった。だからTAKUYAが書いてきた「ひまわり」の詞には、“私はまだ何も手にしていないし、まだまだこれからいろんなものを見たい”という想いが色濃く出ていた。

快活なJUDYと危ういMARY。相反する人格を抱えた女の子が体当たりで夢をつかんでいくサクセス・ストーリー。壁にぶち当たってはもがいて、憧れをひとつ手に入れても決して満足せず、次の夢を目指してどんどん上へと昇っていく。

JUDY AND MARYの主人公は、ずっとそうだった。

しかしYUKIは、もう違った。いろいろなものを手にしたうえで、ひとつだけを選び取っていた。自分が本当に思っていることを歌いたい。フィクションの詞は書きたくない。「イロトリドリ　ノ　セカイ」の頃からでき始めた溝は、少しずつ深くなっていく。

アルバムに入れる曲は徐々に増えていった。「あたしをみつけて」では今の自分を等身大で表現することができた。それ以外は、TAKUYAと一緒に主人公を動かしていった。

「おまえはそういう詞を書いちゃダメなんだよ」

「なんでよ~！？」

何回も話し合った。

でも待っていてくれる人に嘘はつけない。

（TAKUYAの言うことはわかる。でも……今の私はそうじゃないの）

そんなふうに春が過ぎた。